

#1

スターボックス

キムラ、コーヒーの入ったカップを手に、店内のテーブル席に座っている。向かいには女性がいる模様。

「それなに？」

「ん、キャラメルマキアート」

「へ〜俺キャラメルマキアート飲んだことないわ」

「えーっ。そうなの？ おいしいよ、あげる。飲んでみなよ」

「あ、うま！」

「ね、おいしいでしょ」

「うん、もつと甘いのかと思ったー。めっちゃうまいじゃん次から頼むわ」
キムラ、カメラ目線になって立ち上がり、話しながら服装を変えてゆく
(夏服から冬服へ着こんでいく、等)。

「次から、と言ったけど、この「次」は永遠に訪れなかった。……いや、ここにくることはそのあともあった。バイト先から家までの乗り継ぎ駅だったし、待ち合わせにも便利だったし。そのうち何回かは、キャラメルマキアートを頼む日もあった。と思う。たぶん。だから、訪れなかった「次」というのは、彼女と僕の「次」のことだ。だから、つまり……」

#2

キムラの部屋

「#1から二年以上の月日が流れている。」

「つまり振られたって話？ それが(考える)あー、二年？ 前？ か。よく覚えてるね、すごいね」

「畳まれたダンボール(大)を持ってやつてくるミヨコ。開き、組み立ててガムテープを貼る。」

「『ご存知の通り記憶力はいいんだ。……ていうか振られたって言うのかな』
「？ うん」

ミヨコ、床に所狭しと積んであった本や雑誌を手当たり次第ダンボールに詰めていく。時々お菓子を食べたりしながら(ポテトチップスとか)。立ち上がり、他に入れるものがないかなーと見渡す。

「「好きです付き合ってください」って告白して「ごめんなさい付き合えません」って言われたら「振られた」だけど、付き合ってた二人が付き合わなくなることは「別れた」じゃない？」

「ああ……それはそうだね」

「そうだよ」

「五回目のクリスマスと一緒に過ごす頃、僕は彼女に言った。「結婚とかそういうのはどうですか」と。そうしたら彼女はすごくびっくりした顔を

#1

スターボックス

キムラ、コーヒーの入ったカップを手に、店内のテーブル席に座っている。向かいには女性がいる模様。

「それなに？」

「ん、キャラメルマキアート」

「へ〜俺キャラメルマキアート飲んだことないわ」

「えーっ。そうなの？ おいしいよ、あげる。飲んでみなよ」

「あ、うま！」

「ね、おいしいでしょ」

「うん、もつと甘いのかと思ったー。めっちゃうまいじゃん次から頼むわ」
キムラ、カメラ目線になって立ち上がり、話しながら服装を変えてゆく
(夏服から冬服へ着こんでいく、等)。

「次から、と言ったけど、この「次」は永遠に訪れなかった。……いや、ここにくることはそのあともあった。バイト先から家までの乗り継ぎ駅だったし、待ち合わせにも便利だったし。そのうち何回かは、キャラメルマキアートを頼む日もあった。と思う。たぶん。だから、訪れなかった「次」というのは、彼女と僕の「次」のことだ。だから、つまり……」

#2

キムラの部屋

「#1から二年以上の月日が流れている。」

「つまり振られたって話？ それ(考える)あー、二年？ 前？ か。よく覚えてるね、すごいね」

「畳まれたダンボール(大)を持ってやつてくるミヨコ。開き、組み立ててガムテープを貼る。」

「『ご存知の通り記憶力はいいんだ。……ていうか振られたって言うのかな』
「？ うん」

ミヨコ、床に所狭しと積んであった本や雑誌を手当たり次第ダンボールに詰めていく。時々お菓子を食べたりしながら(ポテトチップスとか)。立ち上がり、他に入れるものがないかなーと見渡す。

「「好きです付き合ってください」って告白して「ごめんなさい付き合えません」って言われたら「振られた」だけど、付き合ってた二人が付き合わなくなることは「別れた」じゃない？」

「ああ……それはそうだね」

「そうだよ」

「五回目のクリスマスと一緒に過ごす頃、僕は彼女に言った。「結婚とかそういうのはどうですか」と。そうしたら彼女はすごくびっくりした顔を

#1

スターボックス

キムラ、コーヒーの入ったカップを手に、店内のテーブル席に座っている。向かいには女性がいる模様。

「それなに？」

「ん、キャラメルマキアート」

「へ〜俺キャラメルマキアート飲んだことないわ」

「えーっ。そうなの？ おいしいよ、あげる。飲んでみなよ」

「あ、うま！」

「ね、おいしいでしょ」

「うん、もつと甘いのかと思ったー。めっちゃうまいじゃん次から頼むわ」
キムラ、カメラ目線になって立ち上がり、話しながら服装を変えてゆく
(夏服から冬服へ着こんでいく、等)。

「次から、と言ったけど、この「次」は永遠に訪れなかった。……いや、ここにくることはそのあともあった。バイト先から家までの乗り継ぎ駅だったし、待ち合わせにも便利だったし。そのうち何回かは、キャラメルマキアートを頼む日もあった。と思う。たぶん。だから、訪れなかった「次」というのは、彼女と僕の「次」のことだ。だから、つまり……」

#2

キムラの部屋

「#1から二年以上の月日が流れている。」

「つまり振られたって話？ それ(考える)あー、二年？ 前？ か。よく覚えてるね、すごいね」

「畳まれたダンボール(大)を持ってやつてくるミヨコ。開き、組み立ててガムテープを貼る。」

「『ご存知の通り記憶力はいいんだ。……ていうか振られたって言うのかな』
「？ うん」

ミヨコ、床に所狭しと積んであった本や雑誌を手当たり次第ダンボールに詰めていく。時々お菓子を食べたりしながら(ポテトチップスとか)。立ち上がり、他に入れるものがないかなーと見渡す。

「「好きです付き合ってください」って告白して「ごめんなさい付き合えません」って言われたら「振られた」だけど、付き合ってた二人が付き合わなくなることは「別れた」じゃない？」

「ああ……それはそうだね」

「そうだよ」

「五回目のクリスマスと一緒に過ごす頃、僕は彼女に言った。「結婚とかそういうのはどうですか」と。そうしたら彼女はすごくびっくりした顔を

#1

スターボックス

キムラ、コーヒーの入ったカップを手に、店内のテーブル席に座っている。向かいには女性がいる模様。

「それなに？」

「ん、キャラメルマキアート」

「へ〜俺キャラメルマキアート飲んだことないわ」

「えーっ。そうなの？ おいしいよ、あげる。飲んでみなよ」

「あ、うま！」

「ね、おいしいでしょ」

「うん、もつと甘いのかと思ったー。めっちゃうまいじゃん次から頼むわ」
キムラ、カメラ目線になって立ち上がり、話しながら服装を変えてゆく
(夏服から冬服へ着こんでいく、等)。

「次から、と言ったけど、この「次」は永遠に訪れなかった。……いや、ここにくることはそのあともあった。バイト先から家までの乗り継ぎ駅だったし、待ち合わせにも便利だったし。そのうち何回かは、キャラメルマキアートを頼む日もあった。と思う。たぶん。だから、訪れなかった「次」というのは、彼女と僕の「次」のことだ。だから、つまり……」

#2

キムラの部屋

「#1から二年以上の月日が流れている。」

「つまり振られたって話？ それ(考える)あー、二年？ 前？ か。よく覚えてるね、すごいね」

「畳まれたダンボール(大)を持ってやつてくるミヨコ。開き、組み立ててガムテープを貼る。」

「『ご存知の通り記憶力はいいんだ。……ていうか振られたって言うのかな』
「？ うん」

ミヨコ、床に所狭しと積んであった本や雑誌を手当たり次第ダンボールに詰めていく。時々お菓子を食べたりしながら(ポテトチップスとか)。立ち上がり、他に入れるものがないかなーと見渡す。

「「好きです付き合ってください」って告白して「ごめんなさい付き合えません」って言われたら「振られた」だけど、付き合ってた二人が付き合わなくなることは「別れた」じゃない？」

「ああ……それはそうだね」

「そうだよ」

「五回目のクリスマスと一緒に過ごす頃、僕は彼女に言った。「結婚とかそういうのはどうですか」と。そうしたら彼女はすごくびっくりした顔を

して、「そういうのじゃないよね？」と言った。それはもう、物っ凄く、びっくりした顔だった」

ミヨコ 「付き合ってたんだったら、そうだね」

キムラ 「……そうだよ」

キムラ M 「……ので、「俺たち付き合ってるよね？」と言った。そうしたら、「ごめ

んなさいそういうのだと思わせてしまっていた私も悪かったかもしれないけどそういうのじゃないですよね？」と言われた。語尾が「じゃないよね」から「じゃないですよね」になった時がおそらく決定的な瞬間だった」

ミヨコ、漫画を手に取り読みだす。お菓子を食べたりしながら。

キムラ M 「彼女と過ごすクリスマスは毎年十二月上旬から中旬と曖昧だった。二十

四日と二十五日は必ず予定があったのだ。多忙な人なんだなと思っていた」
ミヨコ、漫画を読み笑っている。荷造りに興味を失っている。

キムラ、ジト目でミヨコを見たあと、ミヨコが詰めた本をダンボールから取りだしていく。

キムラ M 「実際彼女は多忙だった。いつもなにかの打ち合わせをしていたし、いつ

もなにかの企画書を作っていた。彼女の周りでは、いつもなにかが始まるうとしていた」

ミヨコ 「(気づき) あれ、なんで出すの?」

キムラ 「このダンボールはダンボール大だ」

ミヨコ 「………んん?」

キムラ 「本とか雑誌はダンボール小に入れるんだよ」

ミヨコ 「なんで」

キムラ 「いや引越し業者から貰うダンボールとかに書いてあるじゃん」

ミヨコ 「え、でも今まで、大きいのに入れても運んでくれたよ?」

キムラ 「そりゃ運んでくれるよ。その場で「出して詰め替えてください」とは言えないし。持とうと思えば持てるし」

ミヨコ 「持とうと思えば持てるならよくない?」

キムラ 「食べようと思えば食べられるけど苦手ですって公言してる食材を毎日献立に組み込まれたら嫌じゃない?」

ミヨコ 「え?」

キムラ 「マナーっていうか気遣いじゃない? いや気遣いっていうか人としての常識じゃないかな」

ミヨコ 「……。そうかあ常識か。ふーん。常識かあ」

キムラ 「……(言い過ぎた)。いや、でも、まあ、……全然運べますよっていう引越し業者の人もいるけどね。全然気にしないでくださいよっていう……」

ミヨコ 「うん」

キムラ 「……………ああっ！」

考えこんだ後おもむろに顔を覆い蹲るキムラ。に、びくっとするシヨコ。

シヨコ 「うわっ。なにっ」

キムラ 「……………こういうところかもしれない」

顔を覆ったまま呟くキムラ。を、しばし眺めるシヨコ。

しばし眺めるが、わりとすぐ飽きるシヨコ。

キムラ 「……………こういうところかもしれないな」

丸くなったまま呟くキムラ。

シヨコ、きよろきよろ辺りを見渡すも、ダンボールになに入れてたらいいかわからない。

シヨコ 「(手に取り、なんだこれ、という顔)」

手に取るもの、このダンボールに入れるには小さすぎる謎のおもちや、或いは割れ物、或いはゴミのようにも見えるもの。

シヨコ、やっぱり本しかなくない？ という結論に至り、再び本を詰めはじめ。

キムラ 「(のっそりと顔を上げ) そのダンボールはダンボール大だ」

シヨコ 「！(うわっ、と)」

「こういうところかもしれないよね？」

シヨコ 「そういうところかもしれないね？」

「シヨコさん俺がなんの話してるかわかってる？」

シヨコ 「わかんない。何年一緒にいてもいつも全然わかんない」

キムラ 「それはシヨコさんがわかるうとしないからだよ」

シヨコ 「……………そういうところかもしれないね？」

キムラ 「……………」

「そういうところで振られ」

キムラ 「別れ」

シヨコ 「……………たんじやない？」

「おそらくこういうところで振られたのだろう」

キムラ 「でも五回目のクリスマスだよ？」

シヨコ 「……………記憶力がすごいね」

キムラ 「二人ともいい年した大人だし」

「年……………まあね、同級生だったもんね彼女……………じゃない元彼女。映像学科ね」

キムラ 「……………」

シヨコ、手にしていた本をばらばらと捲る。舞台の台本らしきもの。

シヨコ 「いい年っていか何周か回ってもう悪い年なのかもってくらい大人だ

よね。年だけなら。……いい年ってなんでいい年って言うんだろうねべつ
によくはないのに」

キムラ 「(聞いてない) けじめっていうか、守らなきゃと思ったわけですよ」

ミヨコ 「うん？」

キムラ 「彼女のこと」

ミヨコ 「元彼女のこと」

キムラ 「(聞いてない) というか、俺と彼女のこれからのこと？」

ミヨコ 「守る……守る……ね(思わず笑って) ふふ……うん」

キムラ 「うん？ なに？」

ミヨコ 「ううん。なにもない」

キムラ 「なにもないってことはないよ。なにもない時に人は笑わないよ」

ミヨコ 「いや、でも、うん、なにもないです」

キムラ 「敬語は終焉の幕開けだ」

ミヨコ 「え？」

キムラ 「こつちの話。で、なに？ なんで笑ったの？」

ミヨコ 「まだ覚えてたか。いや昔から記憶力がほんとうにすごい」

キムラ 「ミヨコ、「昔から」と言いながら手にしていた台本をばんばんと叩く。キムラ・ミヨコが揃って出演していた舞台のもの。」

「(遮る) 忘れないよ。そんなすぐ忘れるわけじゃないじゃん鳥かよ！ って」
鳥かよ、と漫才のツツコミっぽく言うキムラ。わざとらしい。べつに面白くはない。

ミヨコ 「………鳥かよ？ え？ 鳥？ 鳥かよ？」

ミヨコ 「ふふふ、と笑いだす。」

キムラ 「は？ となりつつ見ている。」

キムラ 「え、うん。……え、鳥頭って言うじゃん。言うよね？」

ミヨコ 「鳥……っ、鳥かよ……っ」

キムラ 「ミヨコ、めちやくちや笑う。何度も鳥かよを反芻する。」

キムラ 「え、言うよ。(ツツコミっぽく) 鳥かよっ！ ほら言う言う」

ミヨコ につられ、キムラもだんだん面白くなってきて笑ってしまふ。

二人、ツボに入ってしまったようにめちやくちや笑う。笑ったら笑った分だけ面白くなる感じで。

キムラ 「(待てよ、となり) いや、ごまかそうとしてない？ そんなに笑うところじゃないよね。べつに面白くなかったことわかってるからね俺。っていうかなんなら馬鹿にしてるよね」

ミヨコ 「(ばれたか、となり) ……でも、なんか面白い感じだったから。キムラくんはずっとそうだよね、なんか面白い感じだよね」

キムラ 「……」

ミヨコ 「学生時代もさ、キムラくんは面白い感じで人気あったよね、女の子から」

キムラ 「……いやべつに」

「彼女……じゃない元彼女、もさ、私らの舞台見にきたとき、キムラくん
のことは覚えてたじゃん。」やっぱキムラくんって面白い感じだよねー」
とかって、盛り上がって。そっからだったじゃん二人、付き合うみたいなの

キムラ 「……まあそれはそう」

ミヨコ 「やっぱさ、どんなに見た目がよくても中身が面白い感じじゃないと駄目
だもんね。見た目なんてもう、あってないようなものだよね」

キムラ 「……見た目はあるでしょ」

ミヨコ 「いや、いやいや！ キムラくんにはもう、見た目なんてないよ。面白い
感じかどうか」

キムラ 「あるよ！ なんだよ見た目が無いって」

ミヨコ 「……（怒られた）」

「あとさっきから思ってたけど面白い感じってなに？ 面白い感じだけ
ど面白くはないって感じがするんだけどどういいう感じのことを言ってる
の？」

ミヨコ 「……」

キムラ 「見た目で好かれてた面もあるよ。今も昔も」

ミヨコ 「ごめんなさい」

キムラ 「謝らないでよ謝られるとこっちが悪いみたいになるから」

ミヨコ 「あ……なるほど……ごめんなさい、(あっ、となり) ああ……ごめ(あっ、
と) ああ……」

キムラ 「もういいよ。……で？ なんで笑ったの？」

ミヨコ 「……戻るね。そこももういいよって言ってほしい」

キムラ 「だって気になるから」

ミヨコ、考えて。

「守るって……守るってなにから？ 「これから」をなにから守るの」

キムラ 「……(なんだろう？ と考え)」

ミヨコ 「地震とか？」

キムラ 「地震？」

ミヨコ 「ゲリラ豪雨とか竜巻とか地盤沈下とか？」

キムラ 「え、え、え」

ミヨコ 「温暖化とか？」

キムラ 「え、そんな地球規模は無理だよ」

ミヨコ 「地球規模が無理なら「守る」なんて言わないほうがいいよ」

キムラ

「……」

ミヨコ

「キムラくんの言葉はいつもふわふわしてて心地よくて面白い感じだけど具体性が足りないよ」

キムラ

「すごい言うね」

ミヨコ

「なんで本や雑誌はダンボール小に入れないと駄目なの？」

キムラ

「え？」

「引越し業者から貰うダンボールに書いてあるから」は理由にならないよ」

ミヨコ、挑むようにキムラを睨む。

キムラ、驚いてから、呆れたように、諦めたように、微笑む。

キムラ

「……困るからだよ。重いものを大きい箱に入れたら、引越し業者の人が大変でしょう」

ミヨコ

「そういうところだよ。なんで引越し業者の人のこと考えてるのさ今。今そんな時じゃないよ」

キムラ

「引越しの準備の時は引越し業者の人のこと考えるよ」

ミヨコ

「(聞いてない) そんなさあ、五回目のクリスマスとか、いい年とか悪い年とか、だから結婚とか、やっぱ無理とか別れるとか止めるとか、なんか今更そんなんじゃないでしょ。おかしいよ好きだからでいいじゃん」

キムラM

「あの時」

ミヨコ、言葉を重ねながら、なぜか泣きだしそう。どんどんダンボールに物を入れていく。本、雑誌、おもちゃ、なにかの衣装のような派手な衣服、謎のお面、等。どれも今まで一緒にやってきた劇団の舞台で使ったもの。

キムラM

「あの時、キャラメルマキアートを、たぶんほんとうにうまいと思った。ほんとうに再会が嬉しかった。映像学科の子、彼女は今、ドラマとか作ってる、企画書書いてて、俺は面白い、彼女にとって面白い感じで、それで。ほんとうに、それで……それでそのまま「次」にいけるって」
横線部分、ミヨコ、キムラM同時に喋る。

ミヨコ

「(前の台詞から途切れずノンストップで喋っている) 好きだから一緒にいましょうとか、好きだから続けましょうとか、そういうものですよ。べつに守らなくていいよ。なんなの守るって。地震から守ってほしいよ」

キムラ

「天災はなあ……どうにも……どうにもならないなあ」

キムラ、困ったように笑いだす。切なく。

キムラ

「泣くことないじゃん」

ミヨコ

「(俯いたまま) いや泣いてないよ」

キムラ

「東京までなんてさ、車で数時間だよ。すぐこられるし。なんなら月イチ

ミヨコ

でくるよ。あとラインするし。ミヨコさん基本既読スルーだけど」

「月イチは多いよ。そんなに暇じゃない。あとラインでお洒落なカフェ」
はんの写真とか送ってこないで反応に困るから。あと泣いてはないよ」

キムラ、積んであった本の中から、舞台の脚本らしきものをばらばら捲る。
閉じて、ダンボール大に入れる。

キムラ

「(覗きこみ) ……ミヨコさんもしかして……俺のこと好きだったの？」

ミヨコ

「……………」

ぬう……っと顔を上げるミヨコ。泣いてはいない。

ミヨコ

「(心底嫌そうに) そういうところだよ。だから別れるんだよ」

キムラ

「……だから振られたのか」

ミヨコ

「(笑って) ……次から、気をつけなよ」

キムラ

「(も、笑って) ……次ね。うん」

Fin